

〔論文〕

壺井栄の戦後民主主義文学運動

須浪 敏子

目次

- 一 新日本文学会がめざしたもの
- 二 壺井栄の戦後民主主義文学
女性と子供の解放の文学、再軍備反対
- 三 「妻の座」の主題

キーワード…女性と子供の解放の文学 再軍備反対

SUNAMI, Toshiko

四国学院大学名誉教授、日本近・現代文学専攻

一 新日本文学会がめざしたもの

新日本文学会の成立と五〇年問題

戦後いち早く新しい文学状況をリードしようと名乗りを上げたのが、新日本文学会だった。新日本文学の創立大会は一九四五年一二月に持たれた。旧プロレタリア文学の伝統を継ぐ、秋田雨雀、江口渕、蔵原惟人、窪川鶴次郎、壺井繁治、徳永直、中野重治、宮本百合子の九名が発起人となり、従来のプロレタリア文学運動（プロレタリア作家同盟）の理想よりゆるやかで幅の広い国民的民主主義文学の復興と発展を呼びかけた。趣意書は次の通りで、一〇〇名が集まり、一七三名が会員申し込みをした。

十数年に亘って日本帝国の侵略戦争を指導して来たわが国の軍国主義者たちは、その反動的・反文化的支配を強化するためにすべての進歩的文学者に暴圧を加え、わが日本文学の民主主義的伝統を根底より破壊し去ろうとした。わが作家達はその自主的活動の自由を奪われ、わが国の文学は最も重大な危機に直面するに至った。

然るにこれらの軍・官・財閥は、聯合國軍の攻撃の前に敗退し、こゝに自由な文学のためのいわば外的社会的条件が与えられた。今こそ日本の文学者は、わが人民大衆の生活的現実・文化的欲求の真実の表現者として、日本文学の中に存在し続けて来た民主主義の伝統の上に立ち過去の遺産の価値高きものを継承し先進民主主義国の文学より学びつゝ、真に民主的、真に芸術的な文学を創造し、日本文学の正しき発展のため結合してその全力を傾けねばならぬ。

こゝに我々は新日本文学会の創立を發起し、日本のすべての進歩的文学者がこの偉大な事業に協力することを切望するものである。

この趣意書で注目される点は、敗戦によって日本の文学者にとって「自由な文学のためのいわば外的な社会条件が与えられた」と、されているところであろう。つまり、「外的な社会条件」とは、占領軍によって非軍事化と民主化政策が保障された、日本政府に絶対命令とされた、ということである。宮本百合子の「歌声よ、おこれ―新日本文学の由来―」

『新日本文学創刊準備号』一九四六年一月）でも、「今日、日本は全面的な再出発の時機に到達している。軍事的だった日本から文化の国日本へということもいわれ、日本の民主主義は、明治以来、はじめて私たちの日常生活の中に浸透すべき性質のものとしてたち現れてきた」と、同様なことが言われている。事実、占領軍は一九四五年度中に日本政府に、非軍事化、治安維持法廃止、政治犯の釈放、婦人の解放、労働組合と農民運動の奨励、学校教育の自由主義化、秘密警察制度廃止、日本経済民主化の「五大改革（財閥解体、独占禁止法、過度経済集中廃止、農地改革、労働三法制定）」を一挙に指示し、実行に移させている。戦後日本の資本主義的民主化のインフラはアメリカ占領軍によって迅速に整備されたのである。

そして、驚くことには、日本共産党さえ、アメリカ軍の日本民主化政策の支持に躊躇しなかったのである。非転向で長い間監獄に繋がれていた共産党員を釈放したのはアメリカの民主主義政策であり、米ソは共に連合軍の一員であったからだろう。共産党中央の徳田球一や志賀義男らは、「人民に訴う」（『旗』一九四五年一〇月二〇日）に「ファシズムおよび軍国主義からの世界解放のための連合国軍隊の日本駐留によって日本に於ける民主主義革命の端緒が開かれたことに対して我々は深甚の感謝の意を表する。米英及び連合諸国の平和政策に対して我々は積極的に之を支持する」と言っている。そして、占領軍は解放軍であり、占領下でも人民民主主義政権の樹立は可能だとの平和革命論の立場を取った。共産党員の宮本百合子も「現代の主張」（『婦人民主新聞』第一号 一九四六年八月二二日）で「私たちの世紀は、資本主義的な民主主義、社会主義的な民主主義、そして、おくれながらもつよく翼を羽ばたいて歴史の二行程を同時に推進する必然におかれている中国や日本などの新民主主義と、この三つの民主主義の進行が世紀の実質を成している」と言い、占領軍婦人対策部のミス・ウィードの要請下に婦人民主クラブの設立に尽力した。

新日本国憲法の作成・公布だけでなく、唯物論では上部構造を規定するとされる土台の下部構造（経済のしくみ）の改革をすべてアメリカの思うままにまかせ、日本が資本主義国の一員として再建されることを日本共産党はよしとしたのだろうか？ プレスコードの指示があり、一九四七年一月にゼネスト中止命令があつても、日本共産党中央は、封建制の根深い日本社会の民主化のためにGHQが大鉈を振るい、自分たちが目指す人民民主主義国家建設の露払い（ブル

ジョア民主主義革命」を代行してくれているとの幻想を捨てなかったのだろうか？ 朝鮮戦争勃発前の米ソ対立が危機的となった一九五〇年一月に、コミンフォルム（共産党国際情報局）が、機関誌に「日本の情勢について」（五〇年テーゼ）を載せ、日本共産党中央の平和革命論の誤りを痛烈に批判して来るまで、アメリカの占領革命の占領政策は樂觀視されたままだった。日本共産党の平和革命論は、具体的などんな青写真と行動計画を持っていたのだろうか。アメリカ側は、戦前の「日本社会は非常に封建的な残存物が多い、国民は封建的な抑圧のために生活水準を引き下げられている、その生活水準の低さから国内市場が狭い、だから日本は軍国主義的な、また、帝国主義的な侵略行動に走った^①」と、理解して大胆な経済民主化を断行した。

しかし、その日本共産党の平和革命論ゆえに、党と大衆文学団体・新日本文学会のあいだは、和気あいあいの共同歩調をとることができた。新日本文学会が戦前のプロレタリア文学の政治優先とは一線を画す文学者の表現の自由を旗印としていたからである。コミンフォルムが日本共産党に、アメリカ帝国主義の支配下にあることを自覚し、占領軍の即時全面撤退、民主・独立・平和日本の建設を行動要領の中心に据えて、米日の反動勢力の戦争計画の反対に立ち上がるよう、政治路線の変更を迫ると、共産党は主流派と反主流派に別れ、新日本文学会会員の多くは、反主流派サイドに立った。ただ、戦後社会の民主化をリードする主体は、小市民的ないし個人主義的自我に変更されたのか、戦前の共産主義運動を踏襲する前衛なのかは、はっきりしないままになった。中野重治の「批評の人間性二」（『新日本文学』一九四七年六月）が指摘したとおり、民主主義革命は占領軍と日本の官僚の合作として上から行われ、民主主義革命の主体（「下からの権力」）がまだ育っていない状態の中での、まだ存在感のない主権者を代行する改革であった。そして、新日本文学会の会員でもあった『近代文学』派同人、平野謙、本多秋五、荒正人たちが主張したのも、戦後の再出発にあたって国民主権国家日本を担う国民の自我をどのように確立させていくか、また日本の主権者がどんな国民国家を望んでいるのかを、まずはつきりさせるべきだということであった。彼らが提起した「政治と文学」「戦争責任論」「主体性論」「転向論」などのテーマも、戦後日本の再出発に際して国民の一人であり世論を動かす文学者が、戦時中どのような民主的主体性を貫こうとし、軍国主義国家の抑圧によってそれがどのように歪められたかを検証した上で、戦後文学の民

主的目標との連続性が考えられるべきだという提起であっただろう。

歴史の跡付け論理から言えば、戦前から日本の資本主義的国家体制を変えようとしてきた共産党が占領軍の駐留を喜び、占領軍の民主主義政策下で人民民主主義政権の樹立を考えるなど、理解しづらい話である。日本国民としてもコミュニケーションとしてもその独立性と責任感の無さには咄然とする。しかし、占領下の日本共産党中央がそのように無策であったのは、まずは婦人参政権を認めた総選挙で政権与党の立場に近づき、アメリカの次にソ連が中国の応援をあてにしていたということだろう。それにしても、一九四六年の一月三日に象徴天皇制を明記した日本国憲法が公布された時、日本共産党はアメリカへの敗北を察知できなかったのだろうか。戦前のプロレタリア解放運動が国民の心を掴めなかったのは、①脆弱な近代資本主義国家を下支えていた農村（国家人口八割の農民）の地租改正と徴兵制以来の格差肥大の実態を掴みきれていなかったためであり、②、①による都会と農村の経済的、文化的格差の再構築を許したためであろう。共産党中央、また黨員個人にしても、日本の実情に即した共産主義化と国民統合への実際的なプログラムを用意できていたかどうかは反省が迫られるのではないかと。そして、中野重治の言ったとおり、国民自らが、どのような民主主義を選択するか以前に、戦争の反省を通して、日本近代の半封建制度的社会制度や習慣のどんな点が不合理、不平等、不自由で、何を民主主義的なものとして育てていくのかを洗い直し、取捨選択し整理する必要があった。自主独立の民主主義という舶来イデオロギーが一応理解できたのは、大正デモクラシーの恩恵を受けた都市部のインテリや外遊経験のあるエリートだけであつただろう。主権在民、人権、平和主義などの民主主義の基本を理解するために、心身に染みつけた封建的人間観を問う戦い、主体性変革、個人の誕生、という、内から血を流して生み出していくしかない重大な問題を日本人は突きつけられていた。それが、「配給された『自由』（河上徹太郎）」の軽くない中味であつただろう。しかも、それは、男と女、都市と農村、出身階層と生い立ち、植民地生活の体験があるかないかなどと関わって、個人の民主化問題への関心と反応度はさまざまであつただろう。敗戦後の食糧難に劣らず、日本の民主化の問題は日本の将来を決める重い問題であつた。そういう国民一人一人の根幹の問題を人民戦線的に扱う文化団体として、新日本文学会の結成は、意義あるものだった。新日本文学会の仕事は、外から来た民主主義のきつかけを国民に浸透させ内在化させ

るさまざまな文学の形を提供する役割を担うものだっただろう

しかし、日本共産党よりもコミンフォルムよりもいち早く、自主独立の国民主権が確立していない日本の組みやすさに気づいたのは、占領軍のアメリカに他ならなかった。占領後足かけ三年の間接統治で、日本国憲法発布などの政治的民主化と経済の民主化を断行し、一九四八年の一〇月以降、日本の経済復興を助けて賠償の取り立てを行わない代わりに、冷戦体制下の味方として日本政府を抱き込んだのは、下と内からの民主化勢力が育っていない日本の弱さを利用したというほかないだろう。

中村隆英の名著『昭和経済史』（二〇〇七年五月 岩波現代文庫）は、「占領軍の日本における任務は、まずこの司令（セオドア・コーエン『日本占領革命』）を実施することであつた」と言っている。その後、「日本ではアメリカでは考えられないような社会主義的な政策が展開されている」という民主化の行き過ぎが本国に報告され、その是正、揺れ戻しが始まったと言っている。それと同様なことを、二〇一六年に厚生労働省を退官したキャリア官僚香取照幸の『教養としての社会保障』（二〇一七年六月 東洋経済新報社）も言っている。

連合国の占領下だからこそできたことには違いありませんが、財閥を解体し、華族制度を廃止し、華族にも皇族にも、天皇家にも（最高税率九〇パーセントの財産税を）課税しました。一九四八年春に発表された財産税の納付番付のトップは天皇家です。天皇家は３７億４３００万円を治め、残りの皇室財産は国有財産になりました。…略…戦後の混乱期とはいえ、個人財産の九割を取り上げる累進課税は空前絶後、過酷なものだったと思います。しかもこの時政府が断行した施策は財産課税だけではありません。農地解放、預金封鎖、デノミ敢行、新円発行、ドッジ税制、できることはすべてやってのけました。

これはもうほとんど革命です。財産課税や農地解放はレーニンやスターリン、毛沢東ですら完遂できなかったほど徹底した改革でした。戦後の日本の財政政策は、社会主義革命以上の革命だったと言つて過言ではないでしょう。これだけの下部構造的民主化が早急に断行された上に、賠償の取り立てが免除されれば、戦後の日本の向かう方向はアメリカに御膳立てされたようなものではなかったのだろうか。

そして、政治経済と文学とは同じスピードでは進まない。古い慣習を打ち破ろうとして生まれてくる文学は、古い習慣の中にある前向きなものとそうでないものを選び分け、前向きなものを新しいイデオロギーに接続させて育て自我主体を作り直していくから、時間がかかるし、ねじれもある。しかし、繰り返して反省され練り直された民意を土台にした歴史は、本当には進歩しない。結論から言えば、新日本文学会の仕事は、アメリカの占領革命の急先鋒にも共産党の路線変更には振り回されずに、明治以後はじめて日本が戦争に敗れた意味（民主化を強要された意味、あるいは、個人が自分の主人であり国民が国家の主人であることの権利と義務）について、文学的立場で、国民の腹の底に響くような問題提起をすることが仕事だっただろう。また、国民間、また、国家間の自立と連帯を日本人一人一人が新しい歴史を築く方向に向けていくべきだっただろう。

非転向と転向者の政治的主体性

『新日本文学会』の創刊号（一九四六年三月）で、会の発起人宮本百合子の「播州平野」と徳永直の「妻よねむれ」の連載が開始された。そして、それは日本の歴史の新しいページをめくるにふさわしい二通りの立場の文学者の、読者国民へのはなむけであった。

宮本百合子は、トルストイや白樺派の人道主義に影響され、一七歳で『貧しき人びとの群』を書き坪内逍遙に称賛されて文壇に出た。白樺派的ヒューマニズムが出来たばかりのソヴィエト滞在で具体的な形をとり、帰国するや日本プロレタリア作家同盟に入り、翌一九三一年非法法の共産党に入党した。ブルジョアの財をもって世界恐慌下の西ヨーロッパを旅するうちに、人類の未来は社会主義にありと確信した。一九三二年に宮本顕治と結婚したが、新婚二カ月で顕治は地下活動に入り、翌年検挙され敗戦まで獄中に囚われた。その一二年の間、非転向で無期懲役の共産党員の夫を支えて、自らも非転向のまま国家権力に屈せず八月一日を迎えることができた。「播州平野」では、獄中で危篤に陥つても信念を曲げなかった数少ない歴史の道しるべ的文学者として、戦争と治安維持法の苦しみを二度と味わうことのない民主主義国家への第一歩を踏み出そうと、読者たちに呼びかけている。無傷潔白な強い自我主体を示す立場であった。

一方、徳永直といえは小林多喜二の『蟹工船』と並んで戦前プロレタリ文学運動最盛期に『太陽のない街』という歴史的小説を生んだ労働者文学の英雄である。しかし、戦争中に『太陽のない街』の絶版を宣言し、国策の線にそった小説を書いたために転向者と見なされていた。その戦争責任を反省し新規時直して新しい国づくりに参加するための主体的自我のありようを見つめ直したのが、「妻よねむれ」の執筆の意図であった。そして、それは、戦時中の食糧難と医薬品不足、また、階級的貧乏の犠牲者として死んだ最愛の妻（母の面影でもあった）に誓われるというかたちで私小説的小説となったものであった。

徳永は一九三二年に熊本で又小作の子として生まれ、一歳から労働者の仲間入りをし、二六歳の時には腕ききの植字工として、また、共産党が指揮した『太陽のない街』の労働争議（共同印刷大争議）の組合幹部として重要な役割を果たした。立川文庫を愛読して独学で小説の書き方を学び、労働者階級の生活と要求の実態を描こうとした作家である。しかし、読者を感じさせる小説のコツは、「小説書きとは、そんな己れの傷口をおのれであばいて、ためしてみるようなイヤなしょうばい（？）だ」と、よく知っていた。労働運動の指導者であることと家族への情愛に引き裂かれて、神経衰弱を病みながら小説を書き続けた。そして、「妻よねむれ」では、小林多喜二的英雄に成れなかつたばかりか、戦争協力に加担してしまった自分の過ちを暴いて、半生の歴史的認識の二重性（皇国史観とマルクス主義史観）と、貶められた封建的階層の中で作り上げられた「卑怯さ」「臆病さ」という自分の人格の弱さ、また、「出る釘は叩かれるという」諺を身体に叩き込まれた奴隷的主体を転向の原因として突き止めている。多分、民主主義という占領軍の大義名分の光に照らされて、初めて発見された自画像、自分と言う人間の権利（自己決定権）の発見だったのではないだろうか。戦後の徳永は「オレ、戦争中は官憲に屈したが、こんどは負けない……！」と、軒昂たる口ぶり話でしたと、立野信之の『青春物語』（一九六二年）は伝えている。そして、戦後に黨員となった。

そして、徳永が戦後一番乗りで書いた封建的自我の告白とはこのようなものである。

「―おれには、かくごが出来ない」

その後、人づてに、K・Tが怒ったということを、おれは聞いている。―臆病とは何だろう？　くらい天井をみつ

めたまま、そんなときは、自分の消極面ばかりが、つきつきとうかんでくる。考えてみれば、おれは労働者として、ずいぶん若くから組合運動や争議に参加してきたけれど、共産党をわがものとして考えたことは、ほとんどない。マルクスやレーニンの云うことを、いくらか読み、いくらか信じているけれど、まだまだ、共産党がおのれであり、おのれがサーベルや鉄砲をたたきふせ、金筋やシルクハットの上になつて、この世の中を支配してゆく共産党として、考えたことは、一度もなかった。いくらか抵抗しても、彼らの上にたち、自分たちが「主人」となる、とは考えられなかった。工場ぐらしから、インテリゲンチヤの仲間に入つたとき、何か興奮した場面で、「いま五年もしたら、革命がくるさ」と、誰かがいうと、もうおれは、そう云つた当人ばかりでなく、その座にいるみんなまで、いっぺんに赤んぼのように見えた。世知がらい世の中を知らぬ坊ちゃんにみえた。じつさい古い革命歌の文句で「きやつらがとばす自動車もーみなおれたちが血と汗の」というところは、咽喉いっばいに歌えたが、同じ聯につづく「千代田の森に赤旗たてて」と言うあたりの文句は、おれには実感がなかった。

—ずうツと昔のこと、熊本で、労働仲間と四五人で「労働問題演説会」を計画して、はじめて検挙されたことがあった。…略…背後関係もなにもない、数人の労働者ばかりの計画だとわかると、調べの係官はいっぺんに態度が変わつた。「おやじの商売はなんだ？ アーン、荷馬車ひきか？」…略…「またと、こんなことするかッ」と肩をこづかれると、泥棒でもしたようにーもう、いたしませんーと、おれは眼をこすつていたのだ。あれはたしか二十のときだったけれど、この卑屈さ、臆病さは、形は変わつても、ずっとつづいている気がする……

（妻よねむれ」十七）

佐多稲子もこの徳永の告白から十数年後に「灰色の午後」（一九五九年）の終わり近くで、二重橋近くの武漢三鎮戦勝祝賀提灯行列に混じって、「忠義みたいなのが好きな」大衆に「少々巻き込まれた」と、自分のマルクス主義史観の奥に隠れていた皇国史観を告白している。これは徳永の場合とは逆で、天皇制国家権力に共産党の組織がのつとられたような窮地においても、宮本百合子などと共産党前衛としての誇り高い新しい人間の生き方を崩さなかつた稲子が、同志である夫の不倫を許しなれ合つてしまったのをきっかけに、自己崩壊を起こした後で気づかれたものである。「あ

あ、共犯だ、共犯だ、どこかでそう叫ぶ彼女の悲痛な泣き声は、官能の泣き声の中にひとつになつて怪しい勝利を挙げていた。しかしその時、折江の魂の中に保たれていた大切なものは、ぱちん、と音を立ててくだけ散つていた」。この「大切なもの」とは、共産党への忠誠心であり、一体感である。川村湊の解説の言葉は、次のように言っている。

この「大切なもの」とは「わが家」党」に対する無罪性、無謬性といったものといえるだろうか。あるいは非転向の志といつてよいかもしれない。「わが家」は、プロレタリアートの勝利と革命の成就を願う男女が、革命的な連帯感、同志愛によつて結びつくことを基礎として作り上げた「夫婦関係」であり「家」なのであつて、それはブルジョア的な頽廃した性関係、欺瞞の夫婦関係とは隔絶したものである（はずなのだ）。…略…折江の感じる「共犯者」の意識とは、こうした精神性に対する肉体が感じる罪であり、また、共産主義者としての性的なモラルに対する罪であり、そして何よりも、そうしたイデオロギー的な結びつきを基礎とする「わが家」を崩壊に至らしめてしまうことの罪なのである。

（解説『わが家』という幻想」佐多稲子『灰色の午後』講談社文芸文庫）

そしてその「大切なもの」に代わつて浮かび上がってきたのが、「二重橋の上のはるか向うに自分たちとは際立つた別のだれかがいる。その別の誰かに向つて群集は自分をもたせかけたいというふうに見えた」という国民大衆の天皇制家族国家への同調的感情なのである。稲子（＝折江）の場合は、明らかに国民主権など考えてみたことの無い大衆の現人神信仰への退却であつた。

下層と上層からの共産主義者

「妻よぬむれ」と「灰色の午後」の双方を読むと、戦前、共産黨員になることが、いかに反社会的なことだったか、天皇制打倒の民主主義的な主体獲得への要求がどんなにタブー視されていたかがよくわかる。しかし、図らずも、彼らの足を引っ張り、心の奥底で逆向きの磁場を働かせている皇国史観や天皇崇拜の感情は、もとはと言えば、四民平等、立憲主義と議会主義の開かれた国家を公約した明治維新の原点を懐かしむものだったのではないだろうか。学制が敷かれて以降、民衆も立身出世をし有為の人物になれば国政に参加できるといふ明治開明性への共感を示した母斑ではない

のか。五ヶ条の御誓文や学事奨励に関する被仰出書は、どんな貧しい境遇の家の子女であつても、学問を身につけ国家に必要な人材となれば将来が開けると、画期的な、民主主義（脱封建制）を約束したものであつた。しかし、共産党に走つた文学者の多くは不幸にも、将来を選択する時期になつて、それが自分たちには手の届かない約束だと知らされて、徹底してラディカルな民権を求めるに至つた人びとであつた。それでも、尋常小学校時代に植えつけられた開明的国家の理想と信頼、明治天皇への恩情といったものは、近代国家の原点として彼らの胸の奥に焼き付き消えることはなかつたのだらう。『太陽のない街』の「仮面をはぐ」の章にも「この自由平等の聖代」という言葉が見える。立身出世の夢の挫折の反動の強さが大正デモクラシーの勢いに乗つて、その当時最先端と考えられたマルクス主義という民主主義に行き着いたのである。少なくとも、彼らの世代は親が行けなかつた尋常小学校へほぼ全員が就学でき、現実の日本帝国がアジアに領土を広げるありさまをつぶさに見、また、記号的創造世界も獲得することができた。しかし、大日本帝国が華々しく領土を拡大していく一方で、日本の近代化が下隅の階層の人びとに重い負担を押し付けて都市のブルジョア化を押し進める構造も明らかになつた。だから、彼らは高野辰行の学校唱歌「ふるさと」の詩（一九一四年、文部省唱歌 六年生用）を現実の人生の目標として声を張り上げて歌つたにもかかわらず、夢は破れたのであつた。

いわば、徳永や佐田稲子、壺井繁治や栄、黒島伝治などは、明治の開明的人材登用から取り残され疎外された青年たちであつた。彼らは明治国家の民権・民主主義への許容度が限界になつた後の、遅れて来た青年たちである。明治四〇年代半ばから大正にかけて就学率が一〇〇パーセントになつた時代の、貧乏や僻地の尋常小卒の優等生であり、官費の江田島の海軍兵学校や師範学校に進む立身出世の道を目指しながら、石川啄木のいう『時代閉塞の現状』（一九一〇年八月）に遭遇し国家に欺かれてしまつた一群なのである。一八九八年に小豆島で生まれた黒島伝治は、その不満を何かにつけ「田舎では阿呆くらいみたいな奴が、大学どころか中学をでたくらいで、威張りくさるからなあ」といったさうである。しかし、尋常小学校で文字や数字を習つたこの世代のものを考える能力、明治の学校教育の成果は、民主主義のマキシマムを追及する思考の源勢にもなつていたのである。

また、日露戦後の財政難から独占資本と軍閥のタイアップに国家が傾いていく、彼らはそれに反対する第一次護憲

運動に出くわした世代でもあった。

ところで、徳永や佐多など、虐げられた近代日本社会の底辺から立身出世コースの機会均等を要求して共産主義に近づいた一群とは別に、上層階級の華族や新興ブルジョアの秀才の中からマルクス主義に近づいていった一群がある。彼らマルクス・ボーイの大半は、ロシア革命などの世界的流行にかぶれたエリートの青春の火遊びだと、いまだに見る向きもあるが、果たしてそうであろうか？ プロレタリア演劇の拠点、築地小劇場や新築地のために爵位も財産もなげうって非転向を貫いた土方久敬（与志）伯爵や、京都学連事件と不敬罪を逆手にとって辞爵し共産党に入党した若き日の石田栄一郎男爵の人道主義、「働らく人こそ尊厳なのだ、自分たちのように、安易な生活にもたれかかっている人間こそ、怯ずべき存在なのだ」（浅見雅夫『反逆する華族』一章）という生真面目な自己批判をも、青春のはしかとひとくくりに見て良いものだろうか。また、国家官吏のエキスパートを養成する東京帝国大学新人会（第二次）が、共産党幹部の人材供給源だったことを考えてみても、国政に無関心な高等遊民の革命ごっこなどではありえなかった。昭和の新興財閥理研コンツェルンの御曹司（大名家華族、大河内正敏子爵の嫡男）大河内信威（『小川信一』が日本プロレタリア文化連盟書記長、共産党員として再度検挙され、一九三四年に転向した後も、日中戦争中、理研グループの持ち株会社（富国工業や理研工業）の取締役として、思想犯の失業救済に当たったことは、あまりにも有名である。戦後、構造改革論の主唱者として有名になった経済学者の井汲卓一や栄の夫の壺井繁治も彼にかばわれたのである。大河内信威は中野重治の青春回想記『むらぎも』に出てくる侯爵家御曹司沢田豊彦のモデルであり、東大新人会のパトロンの存在であった。谷中清水町の新人会合宿所は彼によって提供された大河内家の持家であった。特高警察も遠慮する華族の御曹司をパトロンとした新人会会員の活動は、信威の「ノブレス・オブリージュ（貴族の義務）」が天皇に向わず、労働者大衆に向かったものであった。このように、大正末から昭和前期の恐慌と侵略戦争の始まりの時代、華族やブルジョアという特権階級の若者の中から、高等遊民の生活への後ろめたさや恥ずかしさを自己批判する共産主義者が多く輩出され、下からと上からの民権的欲求は手を結び合うことになったのである。本来、「皇室の藩屏」として天皇を守るはずの華族から天皇制国家を否定する共産主義者が多数出たことは、明治以来の天皇制の根幹が揺らぎ始めたことを意味する。

そして、「赤化」した華族やブルジョアの秀才たちは、敗戦後の大衆民主主義国家を予見していたと言えるだろう。戦時統制経済の立役者でA級戦犯になったあの岸信介でさえ、東大在学中に『資本論』やマルクスとエンゲルスの往復書簡などを讀んだという（『岸信介証言録』）。

観念的なことが苦手で嫌いであつた壺井栄が、「洪民村へゆく」（『新日本文学』一〇巻八号）や「ハモニカと馬車と啄木」（初出未詳）で啄木の影響を語り、占領下の新日本建設を目指す中、「ああ 民主戦線結成のその叫び／あなたの叫びは救国の合言葉となつて人々の心にこだまする／あなたは国の宝 救国の星／あなたの叫びはこだまして人びとの胸に響く／あなたの齢は百年の歴史を重ねつつ その声は千年の真理に通ず／新たに生まれんとする民主日本と共にすすむあなたの声／あなたの声はとこしえに若く人々の心から心へとこだまする／暁の明星のごときその声」（「こだまー尾崎氏に寄す」『月刊読売』一九四六年五月号）と、〈憲政の神様〉尾崎弔堂への讃歌を歌つたのは、共產主義に走つたこの世代の人びとの民主化願望を代表したようなものだろう。

二 壺井栄の戦後民主主義文学

女性の解放をめざした文学

さて、コメも採れない小豆島の半農半漁の貧乏人の娘から、戦時中に左翼的プロレタリア女流作家の地位を獲得した壺井栄は、敗戦後、どんな民主主義文学を展開しただろうか。困っている人に手を差し伸べずにはいられない、そして、困難な環境の中でこそ、人は強く団結し合えると信じているこの作家は、国民が飢えや国家の存亡や社会秩序の変革におののく占領下で、戦争犠牲者への救済と同情を忘れることなく、新しい民主主義国家建設の担い手として働かなければならなかった。仕事も結婚も自分の一存で決めた栄にとって、女性解放問題は自分自身の生き方の問題としてあり、文学的出発の時代以来の深い関心事であつたから、婦人参政権を認める新選挙法を喜び、一九四六年暮れには、宮本百合子に頼まれて、「社会全体の向上というひろい見地から婦人共通の福祉を」（趣意書）目めざす婦人民主クラブの組織づ

くりや広報を手伝った。満州国が成立した年に夫のマルクス経済学者櫛田民蔵を亡くすと職業婦人となって子供を育て上げ、戦後は婦人民主クラブの中心人物として女性解放運動に尽力した櫛田ふきの、戦時中でも親子で恋愛や自由結婚の問題を遠慮なく話し合えた家庭をモデルにした「めがねと手袋」（『革新』一九四六年四月）や「紺の背広」（『西日本』一九四七年八月）などが戦後の日本人女性が向かって行ってほしい方向として、まず、押し出された。新旧女性道德の入り乱れる巷で、女性の生き方がどのように変わっていくかを小説で具体的に示すことは作者の心が躍る仕事であり、読者や出版社から最も要望されることもであった。

戦時中、知恵遅れの弟の後見人として婚期を逃がした旧家育ちの小雪の家制度に縛られた生き方を、満州から引き揚げてきた積極的な従兄の未亡人が解き放ち、年齢や地縁に囚われない結婚への冒険に駆りたてていく話「白いリボン」（『社会圏』一九四八年五月）、結婚しても共働きを続ける共産党の若い女性に、昔の家制度的結婚から抜け出そうとする一組の男女が影響を受ける話「青い季節」（『全通新聞』一九四八年六月～十二月）、また、「嫁」（『風雪』一九四九年六月）も、戦後インフレのドサクサの中で、生きよ、堕ちよと、ヤミ屋となり、金も男も自由に操る逞しい女の新しい生き方をつかんだ旧職業軍人夫人と、四人の子供と共に舅に養われ、貞操を監視される古い良妻賢母型の戦争未亡人を対比的に描いた秀作である。そして、「羽ばたき」（『婦人倶楽部』一九五〇年一月）や「からかねの樋」（『別冊小説新潮』一九五一年一月）は、敗戦によって解禁される男女の自由な結婚を待ち焦がれながら、古い家制度の犠牲者として人生を葬られた男女の苦渋の人生を描いている。

中でも封建的女性差別の重圧を最も強く受けた妾や売春婦たち母子の日の当たらない人生に、榮は日中戦争前後から深い理解と同情をもっており、「縁」「坂下咲子」「うつむいた女」（『小説新潮』一九四九年七月）「晒木綿」（『新日本文学』一九五〇年一月）「麦の花」（『週刊朝日』一九五一年九月）などで繰り返し主題化しているが、「屋根裏の記録」（『中央公論文芸特集』一九五〇年一月）は、その集大成と見られる傑作である。直接には「うつむいた女」を土台としている。戦前、「私生児」の酌婦がまた「私生児」を生み、母子が生きていくために男の慰みものの商売から足を洗えない地獄を描いている。裁縫女学校へも行った商売上手の女将の一人娘のコウでさえ、父なし子であることに変わりが

ない。好きな男との間に出来た子供を「誰の子か分かったものでない」と、男にうそぶかれてしまった。男に未練を残しながらも、コウは子供を自分と同じ私生児にたくない一心で、「婚姻届と同時に多可史を認知してくれた」小さな鉄工所を営む男と無条件に所帯を持つ。しかし、親子三人の家庭のささやかな幸福も戦争に飲み込まれていく。息子が徴兵され、夫の鉄工所も軍需工場に転換されて灰燼に帰した。しかし、コウは、ただ一つの望みの多可史の戦死を知ったとき、「女の悲しみをねじ伏せるような生き方で押し通した母の生涯を納得した」。母も弱い者が踏み台にされる世間の当たり前に抗い続け、ねじ伏せられて死んだのだと。では、誰が弱いものを踏み台にして作られる世の中の頂上にいるのか？

「屋根裏の記録」は、「飲み屋の娘であるために、飲み屋の女の父なし子であるために信用されない貞操、その女の経歴の悲しさゆえに我子までを侮辱する男というもの、何と都合よく責任のがれができやすく男は生まれついているのだらう」と、改正民法以前に「ひめ」と呼ばれ「高貴な呼び方でどん底にいやしめ」られてきた接客業の女たちの金と法の管理でがんじがらめにされた生活、そして、その女の子供たちが生まれながらに被った人権差別を真っ向から批判している。ところが、とつくり握りの「ひめ」たちを搾取している女将の思いがけない人助けが、この作品の幅を広げ、リアルな蟻地獄の人情世界を構築している。もとは赤十字の従軍看護婦でありながら、なぜか今はお尋ね者になった女の身の隠し場所となり、貧乏で嫁の来てもない堅気の漁師に、好きあった酌婦の前借を二度の分割払いにして請けださせるなどの粹な計らいもする。社会のどん底を這うもの同士の人情の機微がさりげなく描かれている。しかし、テーマは、嫡出子でない子供も認知し扶養しなければならない男の義務に甘かった戦前民法の誤りを、ヒロイン、コウの半生を通して鋭く突いている。そして、日本の人権差別と侵略戦争の根源を、酌婦はるみに「生れはのう、自慢やないけど、天皇陛下（大正天皇）と同じや。八月三十一日。」と言わせて、シニカルなユーモアを漂わせている。

男女同権の時代が来ても、戦争に夫や子供を奪われた悲しみが癒えず、前を向いて生きられない女たちへの同情も、栄は忘れていない。「みやまははこぐさ」（『週刊家庭朝日』一九五六年九月）や「尾花」（『週刊家庭朝日』一九五六年一二月）で、妻子ある男性と心中をはかったり、精神に異常をきたした気のどくな女性たちを描いている。

子供の人権を守る文学

栄は、そのような女性解放を目指した小説群と絡めて、一九九四年に日本も批准したユニセフ「子供の権利条約」

(①生命・生存及び発達に対する権利 ②子供の最善の権利 ③子供の意見の尊重 ④差別の禁止) を先取りするような小説や童話類を書いている。栄夫婦は先天性視覚障害を持つ姪の発役を物心両面で支えてピアノ教師として自立させ、又甥の震災孤児岩井右文、また母を失う形で生まれた姪の林真澄を我が子として養育し養子縁組をして法律上の親にまでなった。生まれながらに親と死別したり、障害を背負った子供たちへの同情には並々で無いものがある。血縁関係でなくても、箱根の小涌園で働いていた一六歳の東京大空襲の震災孤児・笹春子を自宅に連れ帰ってマッサージ学校に通わせ、二年後に独立させた例もある。「雨月八日」「まめちゃん頑張る」「松葉牡丹」。婚外子にも親の財産が均等に分けられるようになったのが戦後の二〇一三年であることを思えば、栄夫妻の人間の平等観の徹底とそれを願う心の篤さには、感嘆しないわけにはいかない。自分の生存条件の一つさえ選べず生まれてくる子供たちが、なぜ生まれながらの社会的不平等や差別を背負わなければならないのか。この問いは、栄や繁治の共産主義的人間観に強く負うものである。特に、戦後の童話のほとんどは、子供の人権啓発と戦争のために不幸な目に合った子供達への励ましに焦点が当たったものばかりである。戦前の轍を踏まない新しい日本を目指して、「これからの年を、だんだん子供のための文学に捧げようと思っています」(「私が世に出るまで」『新女苑』一九五四年一月)と発言している。一九五一年の児童憲章制定会議のメンバーでもあった栄ならではの仕事である。例えば、原爆で家族すべてを失ったり(「石臼の歌」、父親が行方不明であったり死亡したり傷痍軍人に成ったり(「母のない子と子のない母と」「八津子」「ヤギ屋のきょうだい」「木の上でおるすばん」「金太郎」「たるおけ病院の看護婦」「あしたの風」「窓から見えるお父さん」、引き揚げ家族や罹災家族の一員であったり(「小さなだるまさん」「ろう石」「坂道」、子供自身が栄養失調で死んだり(「あたたかい右の手」、母親を失ったり(「おべんとう」、戦時中の用水池に落ちて死んだり(「おたまじゃくし」、である。だが、生き残った子供たちは家族と力を合わせて生活の立て直しに挑んでいる。そして、改訂版「柿のある家」

「坂道」「母のない子と子のない母と」の三冊が昭和二六年度の文部大臣賞の対象となった。「罹災もしてゐなければ兵隊にも引っぱられたわけでもないのに、何故まるで我こそは戦争被害者の雄なりと言った顔をいつもしているのか。栄夫人だけでなく繁治氏だって戦争中どういう詩を書いたか知る人は知っている。」（十返 一「雑誌小説評」『文芸時評八号』一九四六年五月）と、物事の表層しか読まない同郷の批評家に叩かれもしたが、壺井夫妻は、太平洋戦争が引き起こされた原因には、古い憲法や民法の中に厳然とあつた国内外の人間（子供を含む）に対する人権差別が深くかわつていたことを重く見、平和と民主主義の使徒的役割を普段の生活の中で実行したいと思つていたのである。あのシャイで知られた栄が私小説的な家庭小説の中で活躍するモデルの自分を「作家」「戦争がくれた赤ん坊」「妻の座」）、「童話作家」（「お芝居」）、「女流作家」（「右文覚え書」）などとはつきり打ち出すようになったのは戦後のことであり、現実と虚構の距離をちぢめて、反省的英知で人権差別と戦争を克服する表現者として立とうとした覚悟の表れと見られる。繁治は関東大震災下の朝鮮人虐殺をつぶさに体験し、夫妻は小林多喜二を虐殺した治安維持法下の共産党弾圧の非人道的抑圧をまざまざと体験したのである。また、天皇の署名捺印のある「作戦要務令」で俘虜になることを禁じられ、兵糧は現地徴収を建て前とされた日本兵が、略奪、虐殺、強姦、敵の俘虜への残虐行為に及ぶことは、軍上層部が日本兵を弱肉強食の鬼畜道に追い込んだも同然と見ていたにちがいない。国家権力によつて国民を非人道的な侵略戦争に駆りたて、しかも、日本は、中国や朝鮮、東南アジアの国々に日本の言語、言論、思想を一方的に押しつけた。栄夫妻の戦争観は一九三〇年代から四〇年代にかけて非国民としての人権蹂躪（生活権の剥奪、言論・思想の自由の剥奪）を受けた共産主義者の立場からのものであり、女性と子供の人権論は、戦前の儒教道徳「女子と小人は養ひ難し」に栄が反発し新しいモラルを求めていた結果のものであろう。

壺井栄の戦後民主主義文学のテーマにはすでに述べたように、①従来からの女性解放の視点をアメリカの民主主義政策を援軍として推し進め、腹の底からの女性や子供への差別撤廃を吐き出した小説群、そして、②戦争のために不幸になった子供を励ます童話類と、又甥（長兄の孫）にあたる戦災孤児右文を一九四五年一〇月から家族に迎え入れて養育し、戦争が罪なきものを不幸に陥れた罪を栄流に受け止め、戦争を抑止できなかった責任を抱え続けたテーマの小説群

である。③「秋蒔きの種」(『女性ライフ』一九四六年一〇月)「渋谷道玄坂」(『東北文学』一九四七年五月)「妻の座」(『新日本文学』一九四七年七月〜一九四九年七月)「宿根草」(『婦人』一九四八年一月)らの、徳永直の後妻になって二カ月後には追いつかれた妹シンの離婚に係る栄や徳永の古い結婚観をえぐる暗く深刻な小説群も、本来は、共産黨員徳永の深い包容力と指導性によって足りないものを補い合う、あけつびろげな和気あいあいの労働者家族、戦後の民主主義的家族の一典型になるはずのものであったと、思われる。例えば壺井家の家族は、夫婦と妻の姪と又甥で構成され、妻が稼ぎ手のおかあさん、夫が妻のマネージャー兼大黒柱のお父さん、成人した姪が家事育児係りのお姉さん、又甥が「ほんそ(本尊)」の子供で、時にはアカの他人も同居する、不幸な子供の明るい成長を喜び合う雑居家族である。その向こうを張る新しく自由な労働者家族の形が徳永に期待されていたと思われる。少なくとも、栄は田舎の因習から逃れられず四〇才まで独身の小学校教師であつた妹シンを、徳永なら幸せにしてくれると、期待を込めて結婚させたのであつた。

壺井栄の政治的立場

反戦の願いを秘めた右文の成長記録の物語に話を進める前に、五〇年問題前後の壺井栄の政治的立ち位置について触れておこう。賀茂道子の『ウォー・ギルト・プログラム(GHQ情報教育政策)』(法政大学出版局 二〇一八年)によると、①昭和天皇の「人間宣言」によって新たな天皇制への地歩が固まったこと、②公職追放によって、原爆投下を国際的非難にまで高めて国体護持を図ろうとしていた保守勢力が後退したこと、GHQが融和路線へ舵を切った一九四六年一月がメディア政策を含む占領政策全体の大きなターニングポイントだったと指摘している。そして、それ以後は、大日本帝国憲法下での天皇制の存続を目論む保守派への牽制役として利用されていた野坂参三以下の共産黨員らはメディアから遠ざけられたという。様々な調査で日本国民の多くが穏健な天皇制を望んでいることが分り、軍国主義的思想を排除した民主主義国家再建の道筋が見えて来たからであるという。また、時を同じくして、世界規模の東西冷戦の緊張から日本を反共の砦とするアメリカの必要性が生まれ、いわゆる逆コースと呼ばれる対日政策が始まった。一九四七年

一月にはマッカサの政治顧問アチソンの反共宣言、二月にはゼネストの禁止声明が出された。そして、朝鮮戦争が勃発した一九五〇年六月にはレッドパージが開始され、七月には警察予備隊も設置が司令された。一九五一年九月には社会主義国を除く西側諸国との間で太平洋戦争終結のためのサンフランシスコ講和条約が締結され、アメリカとの間に、講和後もアメリカ兵の日本駐留を認める日米安全保障条約が結ばれたのである。

壺井栄の占領下の作品を注意深く読むと、CIE（民間教育情報局）からも国民からも好感されていた野坂共産党とGHQとの蜜月の始まりと終わりを、機敏にとらえている。一九四五年一〇月の政治犯釈放命令で出獄した蔵原惟人や西沢隆二描いた「表札」（『思潮』一九四六年三月）や「地下足袋」（『民衆の旗』一九四六年二月）、戦後の天皇制の在り方や日本国民の食糧が侵略戦争に依らずにまかなえるかなどを民衆が討論する「嫩草日記」（『婦人春秋』一九四六年三月）、また、栄に人生のアドバイスを与えた思い出深いキリスト教の巡回伝道師の話、「明治の末期から昭和の始めにかけて、瀬戸内海の島から島へ村から村へと年がら年中夢と理想を積み込んで、終点のない航海をつづけていた」ピツケル船長の福音丸の思い出「人生勉強」（『モダン日本』一九四六年五月）などを書いている。「人生勉強」などは、日本にキリスト教を広めることを考えていた占領軍へのへつらいがあつたかもしれない。栄も、占領期初期にはアメリカ民主主義時代の到来を歓迎して人並みにその喜びを描いていたのである。シンパの栄にしても、治安維持法による不当弾圧を被った戦前の共産党員たちにとつても、資本主義か共産主義かの政治経済体制の選択以前に、軍国主義の排除、民主主義的人権思想を根づかせる政策を歴史的急務としていたと思われる。そして、それは、アメリカ側の日本民主化プログラム「ウォー・ギルト・プログラム」の初期の目標と重なった。しかし、レッドパージや朝鮮戦争がおこった一九五〇年十一月の「木かげ」（『展望』）には、栄は、無邪気にじやれている隣家の飼猫を垣根越しに銃で撃つてまともに謝りもしない士官学校出の若者に「朝鮮戦争が永引いたら、戦争にゆくから、結婚どこでない」と、言わせている。警察予備隊の創設（再軍備）に馳せ参じようとしている保守派の若者の猛々しさに、戦前の軍国主義復活を懸念している。そして、それが一九五一年には現実となつて、単独講和条約と同時に日米安全保障条約が締結され、日本は国連軍（Ⅱアメリカ軍）の要請で機雷特掃隊を出し、戦時物資の輸送を引き受け、さらには公職追放を解除された旧陸海

軍佐官級が指揮する重装備の警察予備隊を持つことになった。そして、朝鮮戦争にアメリカ傘下の国として協力する日本政府を批判しながらも、アメリカ国連軍と戦う北朝鮮、中国、ソ連の社会主義陣営を武力闘争で応援する側には廻らなかった壺井栄は、日本共産党国際派（反主流派）に近いシンパであったとみていいだろう。栄の一九五一年四月二七日の日記にはレッドパージされた甥の戎居仁平治に関して、「就職の関係で脱党の意向を相談される。賛成はしたもの、感慨の浅いのは不思議なほど。動けば除名、従えば不満、除名されても心に響かない党とは、やっぱりつらいことだ」とあり、繁治に関しては「相変わらず『平和』のために出かける」と、ある。また、国際派であった宮本百合子の没後（一九五一年一月二三日 髄膜炎菌敗血症で死亡）に新日本文学会の主流派の人びとに対して「Mさんは一步もゆずらぬあの激しきで、世界の平和と日本の独立のために最後までたたかってきた人だと思います」（『ヒアノ』『別冊文芸春秋』一九五二年八月）と言っている。栄の最も親しい友人の佐多稲子も、党上層部の分裂に対し統一を求める意見を表明したことで除名処分に会っている。後に佐多は「溪流」（一九六三年）の中でこう書いている。

このときの日本の状態の中で、党が内部闘争に追い込まれていることは、単独講和と日米安全保障条約を結んだ勢力にとつて都合なことではなからうかというおもいが消えなかった。旧軍人と元特高関係の追放が解除され、日本の再軍備が、米軍の長期駐留の下ですんでいた。戸締り論などが一部に通用している。こういう中で、党主流派の山村工作隊というような方針でいいのであろうかという疑問が友江には強い。

幼い右文におもちゃのピストルさえ禁じた栄の心情は、どのような戦争であれ、戦争はもう二度と御免だと、いうものであっただろう。それ以後の日本の反動化についても、栄は「もの言えぬもどかしさ」（初出未詳）で、戦後、言論の自由が保障されたのに、又しても「秘密保護法だの、教育二法だのと、：略：国民をだまらせる法律」ができ、「原爆使用を支持する」「日本人」も現れ、国民の大部分が願っている平和な暮らしとは別の方向に日本が動かされている、と憤慨している。この憤慨から、もう二度と戦争はイヤと思わせた日中戦争、太平洋戦争の記憶を忘れてはならないと国民に呼びかけたのが、「二十四の瞳」なのであろう。

そして、見逃してならないのは、占領軍の政策変更やコミンフォルムの平和革命批判のはるか以前に、壺井栄はアメ

リカが最も恐れていた原爆投下への非難を童話「石臼の歌」（『少女倶楽部』八月—九月合併号 一九四五年九月一日）で書いていることである。GHQ本部が日比谷の第一生命ビルに設置される以前に、少女読み物として被爆を初めて取り上げた。小豆島の祖母の家に疎開した翌朝、広島への原爆投下で家族全員を失った少女瑞枝の悲しみと、島の家の子供になって残された命を大切に生きよ、と慰め励ます伯父一家の温かさを描いている。この作品が童話集『十五夜の月』（一九四七年七月）に収められる際、プレスコード（占領軍批判）に引っかかって、原爆で両親を亡くした瑞枝と血縁を失った祖母一家の悲嘆にくれる記述が田舎の盆の行事を喜ぶにぎやかさにくるめられた記述に改作されている。いわば、日本の民主主義化のために、国民に知らされていなかった太平洋戦争の事実を暴き、日本軍国主義の侵略性や、ハーグ陸戦協定およびジュネーブ条約違反の俘虜虐待や住民虐殺の実態をメディア（新聞やラジオ）で国民に知らせ、普遍的な人権、人道についての再教育を行った占領軍自体が、勝者の敗者に対する特権で、原爆という戦争犯罪を堂々と隠匿した。その事実には栄は直接触れたのである。原爆の破壊力を知りながら戦争終結の切り札として原爆を投下し、検閲で隠蔽したことを、壺井栄は、黙って批判するほかなかったが、アメリカ民主主義の一面の非人道を憎まずにはいられなかった。原爆投下によって日本の民間人の大人や子供がこうむった戦争被害を思い、戦争当事国はどちらも国民の言論の自由を奪い、非人道的で「戦争の有罪性」を免れない。償わなければならないと、強く思い続けたのである。

戦災孤児右文の成長記録

ところで、「石臼の歌」は、広島の子供の原爆災害を漠然と描いたものではない。広島とは栄の長兄が残した家族、岩井一家が住まう土地であり、栄が引き取って育てることになる右文の父方のふるさとであった。甥の典と卓は、幼い時の数年、結婚前の栄が母親代わりとなって育てた濃い間柄である。未亡人となったそこひの義姉が、子供達との生活を担うために鍼灸マサージ師の資格を取る間のことであった。そして、その広島の岩井家の人々が原爆で亡くなるようなことがあれば、ジャーナリストの父（卓）を失った右文は、母親以外に身寄りがなくなる。そんな心配で心を痛めながら「石臼の歌」を描いたと思われる。幸い広島の義姉と典家族は生活の資財は焼いたが、命拾いをした。ところが、

右文の母親が、一歳になったばかりの息子を残して栄養失調とチフスのために横浜で死んだ。それで、栄夫婦は母方の親類をたらい回しにされていた右文を横浜から自宅へ連れ帰らざるを得なかったのである。その経緯は「一粒のぶどう」(初出未詳)、「めみえの旅」(『小説新潮』一九五一年四月)に詳しい。「石臼の歌」は、栄が兄の遺族を気遣って書いたものであり、右文の運命とも深く係っていた。栄にとって原爆の被害が他人事でなかったのは、「夏の花」の詩人原民喜のために追悼文「曇り日」(『日本評論』一九五一年五)を書き、GHQの報道規制の中で「屍の街」「人間檻樓」を書いた被爆作家太田洋子の物心両面の支援を長く続けたことでも窺える。

さて、どんなに発育不良の子供であろうと、親なら生かすことに手を尽くすであろうと、四六歳の栄と繁治が親代わりを引き受けて引きとったのが、満一歳になったばかりの戦災孤児で又甥の右文(長兄の孫、一九四四年九月一日生まれ)であった。母親の命と引き換えに生まれてきた姪の真澄や先天性白内障の戎居発代を放っておけなかったのと同じ心持で、毎日のミルク代と栄養注射代に家計を破たんさせながら、「日かげの草も時がくれば花が咲く」と、榮流に戦争が無垢な子供に犯した罪を償い始めたのが敗戦の年の一〇月であった。右文の心と体に残る戦争の傷跡(飢餓感や胃腸障害、癲癇持ちの性格)を胸の詰まる思いで見つめて記録し、それが彼自身の成長する力と壺井家族の愛情とで、普通の子供に近づいていく経緯が物語風に記録された。それは、明星学園小学校へ上がるまで続いた。更年期障害や妹の離婚などで健康に自信を持てなかった栄が、右文の母親とほぼ同年令になった姪の真澄の協力を得て、遅ればせながら右文の乳児期、幼児期、幼稚園期それぞれの課題と向き合っていく戦災孤児の成長の記録である。作品で言えば「一つ身の着物」(『平凡』一九四五年一月)「戦争のくれた赤ん坊」(『婦人倶楽部』一九四六年二月)「若い乳房」(『女性線』一九四六年二月)「北海道の花」(『新女苑』一九四七年一月)などを始めとして、「たからの宿」(書き下ろし 一九四九年三月)「日が照り雨」(『女性改造』一九五〇年十一月)「一粒のぶどう」(初出未詳)「めみえの旅」(『小説新潮』一九五一年四月)「朝霧」(初出未詳)「右文覚え書き」(『P・T・A』一九四八年五月〜一九四九年三月)「たんぼぼ」(『婦人民主新聞』一九五二年二月三日)と続いていくシリーズである。「大根の葉」以来の、手術を重ねて視力を回復し、ピアニストを目指すようになる克子の成長の物語が戦前の栄のメイン・ストーリーなら、戦後のそれは、壺井家に

引き取られた栄養失調の戦災孤児右文の成長の物語ということになるだろう。

右文を連れ帰り、その日のうちに医者に連れて行つて言われた言葉がこうであつた。「かわいそうにね、戦争のぎせい者……もう四五日もおそかつたら、助かるかどうかわからなかつたですよ」。「完全な栄養失調ですよ。これがむくむところまでゆけば、もう駄目、やせているのがまだ見込みのあるところです。なんでもいい、うんとたべさせて、いやになるまで食べさせてごらんさい。飽食療法です」。そして、「その青黒くやせたしぼんだ顔を見て、私は、ドイツの反戦画家ケーテ・コルヴィッツの画をそのままに思い合わせ」た。右文が父から与えられた「文学を尊敬する」と言う意味の名前、そして、「母と子の栄養までも戦争の方に集中された」ことへの「若い母の激しい抗議」に思い入りながら、「年とつた第二の父母は、父母としての責任に鞭うつていった」（「右文覚え書」）というのである。しかも、右文は心の発育も退化していたようで、幼児本来の表情の豊かさや好奇心もどこかへ置き忘れていたようであつた。

泣かず、笑わず、物言わず、ただ餓鬼のように食欲だけの旺んな幼児。くまどつたようにかげりのあるくぼんだ眼、老人のように黄色くたるんだ皮膚、蒼白な唇、尖つたあご、……略……誕生がすぐても立ち坐りも出来ない右文は寝かされて食べた。食事を与える者にだけ親しみを見せ、あとは縁無き衆生とばかりに憂うつな顔をしていた。それはまるで孤児となつた自分の境遇を知っているかのような表情でさえあつた。ところが、二歳になる一月ほど前、いざつてばかりいた右文が突然歩き始めた。

（「北海道の花」）

右文はひよろひよろした足つきではあるが、ひよこひよこつと、足早に六七歩交わして正子の胸にとびついてゆき、きやつと笑つた。それはいかにも嬉しそうだつた。その夜はもう大変な騒ぎだつた。歩きつかれた右文がぐっすり寝入ってしまったあとまで、私たちは興奮していた。……略……あんよはめきめき上達して三日もたつと、ぐるりと回れば十間もある廊下を一気に歩けるようになった。……略……そればかりではなく、口の方までが急に上達して、いつのまにか大人の言葉を取り入れたりして意思表示をするようになった。

（「北海道の花」）

そして、最初は母親の遺言にほだされて心の準備も無いまま、「わが家」に連れ帰つた赤ん坊であつたが、満三歳にもなると、体はひ弱なまま「彼の知恵の芽生えは、私たちを笑わせ、考えさせ、感動させる」ようになった。「困惑と

憐憫は希望と愛情に」「(日が照り雨) 変わっていった。一つ年下の隣のカツ子ちゃんと、おかあさんゴツコをして、おなべの中でうどん粉と泥んこをぐちゃぐちゃに混ぜてパンの生地づくりをしたり、敷居の上に下駄箱にしまつてあつたよそゆきの履物を一〇足も一列に並べ、その上に泥んこを山盛り積ませて貨物列車に仕立て、機関車は沈丁花の小枝で煙をモクモクと吐かせるといった見立て遊びに熱中したりである。右文の自我の発達は遊びの想像力の中で羽ばたいていく。そして、子供の想像力の世界と大人の生活の便宜が衝突したあげく、大人のおかあさんたちは「子供にとつては治安維持法」の「押入れだね」を仕方なく言い渡す。しかし、ソーメンを「ひとりですつかまえる」と言い、「パンツがこぼれた」という子供の切実な詩的表現に「私たち」家族は感動する。

幼稚園に通うようになると、一人っ子の自我はめきめき増長し、母が「今日は仕事なんだから静かにしておくれよ」とかまつてやらないと、わざと七八人の友達を連れてきて座ぶとん列車で家中をかけめぐり、ヤクザことばで威嚇して、怒った母親に力任せに尻をぶたれる。また、「金銭で物を買うことの興味」に引かれて、幾度か家の金を持ち出し、お宮さんの賽銭箱に細い手を突っ込んだりして、家で禁じられている鉄砲のおもちゃやガムやキャンデーやメンコを買い、K子ちゃんと分けて秘密のアジト(「ヒミツカ」)に隠した。それがバレたとき、母親の感情は爆発して「馬鹿! 出てゆけ! うちの子にしない!」と激しい声で怒鳴った。右文は「もうしません、本当にしません」と大声で泣きながらまとわりついてきて離れなかった。家族や社会のルールを習得するために母と息子はしばしばこんな修羅場を繰り返しながら、ますますきづなを強めていく。そこには、ちょっとした嘘も泥棒の始まりと、心配で頭に血をのぼらせる普通の母親の常識とともに、金でものを買う欲望も、「ヒミツカを作ろうとした六歳の子供の心理も」、「大人の世界への背のび」をしたい「人の子の知恵の芽生え」ではないか、誰も一度は通る道ではないかと、自分たち大人の通ってきた道筋を振り返りつて考える度量の広い母心があった。危険な遊びを通して子供は大人社会に分け入っていく。右文と二人三脚で、野放図に伸びようとする子供の自我を社会的自我へと誘導する人生の先輩としての母親がそこにはいる。だからこそ、もう来年には小学校へ上がる右文のために、戸籍上も親子になる手続きを進めていく。広島島の祖母への「めみえの旅」もその一環である。生い立ちの事実を右文に知らせた上で、今は、「一つ家に、父母と呼んで暮らしている私たちの姓

が異なっていることの不便、そこから巻き起こるかもしれない複雑な憶測、そういう不必要な思いをお前さんにさせないために、入籍しようと考えたのだ」（「一粒のぶどう」）。もちろん、大人になって自分の意志で元の籍に戻りたければ、そうすれば良い。自分の考えで自分の人生を築くために、「出来る限りお前に真実を知らしてゆきたい」と、第二の父母たちは右文の人格への愛情と敬意をこめて、養子縁組をした。真澄とも意志を確認して同時に養子縁組をしたのだ。そして、「ふまれて、にじられてお前たちは生きのこったのだぞ。ふまれてもにじられても、お前たちの苦労を再びくりかえさぬために、生きていくんだぞ！」（「たんぽぽ」）と、エールを送った。

実際、右文は「たからの宿」一家の「ほんそ（本尊の小豆島方言）」として大切にされ、家族の愛情を独り占めして育てられた。父親はライターを三つも壊され、「懐中時計も腕時計も置時計も、一度はみんな右文にこわされて」も「知識欲のあらわれだからね」と、寛大であり、母親は「生みもしないのに」育てる楽しみが与えられたと恩に着ているし、実質的な養育係の正子は母親と死別した自分の運命と瓜二つの弟がいとおしいばかりで、叱ることさえできない。しかも、祖母と呼ばれる方がふさわしい第二の母は、どんなに右文を可愛がっても、「摩擦を好む子供の自然さ」を満たす兄妹を作ってやることはできないし、健康の都合でまた彼を手放さなければならぬかもしれないという負い目を持ち続けている。その負い目も手伝ってか、ブランコも砂場も自転車も右文のいうままに与えられた。栄に愛された「大根の葉」シリーズのヒロインのモデル、姪の発代でさえ、「ピアノの稽古で、自分には早朝練習を欠かさず実行させ、厳しくつけた伯母が、どうして右文にはあんなに甘かったか、と不思議が」⁶った。実際、目の悪い発代が芸で一人立ちする道を決めた一二歳の時に買い与えられたピアノが、「一種のきまぐれか、もののはずみ」でその五年後には、八歳の右文にも買い与えられた。ピアノは壺井家の家計には高価で、「猫車」を押すように一途に押して月賦で返済すると「ピアノ」には書かれているが、信州上林山の湯方からの繁治宛て書簡（一九五二年九月五日付）では、「月賦になどしないで解決してもらいたい」と繰り返し念を押している。栄が右文を格別可愛がった理由は、孤児の不憫さに加えて、一つには、鳴り物好きの栄の父親や音楽の天才といわれた兄（右文の祖父）の血を引いているとしか思えない天分の芽生えを幼稚園頃から発揮したためであろう。二つ目には、東京で子供の人権が重んじられる第二の父母に育てられたた

めに、栄がよく知っている小さな労働者の知恵を早くから「刷込ま」れた小豆島の村の子供とは違って、さまざまなき物とつながる子供の本性的「地図」を右文はプリミティブな形で家族にあげつばろげに見せた、ということであろう。栄は「この子どもを育てながら、私は、自分の童話について、目をひらかれたと思っています」（「私の童話はどうして生れたか」『新女苑』一九五四年三月）と言っている。新しい時代の子供とその育ち方のありさまを栄は右文によって知ったということである。日本語の発音は幼児音でも、難しいメーデーの歌の節回しをすぐに覚えて正確に歌うし、ともろこしの葉擦れの音を聞いて、「あッ 風がいるよ、たくさん風がいるよ」と告げ、「お月さま 誰が半分に分けたの？」と、尋ねる詩的童心の持ち主であった。詩人の繁治も彼の芸術的感性に期待し、「右文よ／お前は俺の夢であり／現実なのだ」と歌った。東京へ出た若い壺井夫婦がつくづく感じた芸術的環境格差を右文の代では縮めてやりたいたったのであろう。東京で中年になって作家をめざした栄が逆立ちしてもかなわなかったのが、同じ年の導き手、宮本百合子の芸術的素養の幅の広さや深さ、そして、つねにみずみずしい想像力を湧き立たせる早熟性であった。外国語をあやつり世界の動向を自分で判断する博識と行動力、自由の女神のように大衆の先頭に立つてひるむことのない自信、これは僻地育ちの栄や繁治が羨望するしかない芸術的能力であった。そのくやしさをこめて栄は、次のように言っている。

天才教育などと言うものについては、やたらに信じていません、…略…ただ機会をのがしたくない気持ちだけは、相当根づよく私の心の中で育てられていたでしょう。もしそうだとすれば、これは私の五十年間に養われた心の眼だと思っています。不如意だらけで、何一つ十分に培うことの許されなかった私の親やきょうだいや、甥や姪や、そして同じようなうき目を見ているたくさんの人びと、その思いが心の奥になくて、どうして文吉にピアノなんぞといえましよう。

（「ピアノ」『別冊文芸春秋』一九五二年八月）

宮本百合子の文学を豊饒なものにした音楽や絵画、外国文学や社会科学などの教養が右文の生育環境の中に一つでもあれば…、という配慮である。栄や繁治は将来の文学好きでそれで生計を立てるようになったものの、決して自分たちの文学が既成の文壇や評論家から高い評価を受けていないことをよく知っていた。日当たりの悪い肥沃でない土壌から懸

命に養分を吸い上げ、地を這うように育った僻地生まれの貧しい文学であり、芸術環境の機会均等を右文には保証したいと思ったのであろう。

しかし、何といつても、壺井栄の文学の特性は、共同授乳や共同保育で村の子供達を村の宝（財産）として育てる相互扶助的母心（＝農村文化の共同性）に土台を置いている。それが日本の近代化と共に「うちで育てばうちの子」という家族単位に代わつても、村落共同体の相互扶助的母心の広やかさや無欲さを人類の理想として受け継いだ彼女の文学は、戦前に劣等とされた女性や子供、身寄りのない老人、障害者や貧乏人、朝鮮人など凡そ差別されてきた人びとをその母心の中に抱き取って描いた。そういう傾向のルーツを探れば、祖母や「母のあの子育て縁というようなもの、平気で他人の子供まで育てていたあの気持ち、子育てを縁の深さというような解釈をも交えていたあの考え方、それが私に遺伝したものでしょうか」（「遺伝」初出未詳）と、言い、「祖母や母の母性としての心の豊かさに感動せずにはいられなかった」（「私の童話はどうして生れたか」とも言っている。そして、そういう栄の「母性としての心の豊かさ」を実生活の中で受けて育った姪の林真澄は、栄が病気の時など実に細かい気働きをして、「もう自分たちには子供は生れることはないだろうと思うことで、ミユキを育てたことの有りがたさが、こんな思いで自分に返ってくるとは信じられないほどだった」（「たからの宿」と、実の親子同然の愛情が通い合う娘に育っていた。栄の又甥の戦災孤児右文が転がり込んで来た時にも、真澄は「私、弟ができたと思って可愛がってやるわ。ご恩返しにね。おしめの洗濯なんて、ぜったいにお母さんの手かりないわ」と家族が増えたことを喜び、栄の執筆に支障がでないように気遣った。つまり、栄の「子育て縁」は真澄にも繁治にも感染し、壺井家は子供ができない子供好きの夫婦と、赤ん坊の時に母を失った子供たちが一緒に暮らす子宝の宿になっていったのだった。チビの右文にしても、気がつけば、教えもしないのに栄そっくりに箸をにぎり、魚の身を上手にむしって食べているのだった。

「産まず女の極楽」という家族観

しかし、「子無きは去る」といった「女大学」の教えや、日中戦争以来の「産めよ増やせよ」の人口増産政策が一般

的な女性道徳であった時代の女性にとって、自分の腹を痛めた子がないことは、大変な負い目であったと思われる。様々な因習をなぎ倒して生きてきた榮にとつてさえも、産まず女の負い目からまったく自由であったとは考えられない。脊髄カリエスの後遺症であったとしても、言わず語らず女の不具のコンプレックスを刷り込まれていた。童話「海のたましい」のおかあさんは「女のお産は命がけと、昔からいわれているでしょう。男が戦争にゆくのと、同じ気もちでないければならないのですよ。戦争には、どうでもこうでも、勝たなきゃならないというのが、お産では、どうでもこうでも、りっぱな子どもをうまなきゃならないことになるの」と改まって言う。それほどに子供を産むことは女の本懐とされていた。その頃の女性は腹を痛めて産んだ子供の成長に自分の存在意義を見出したといわれるが、榮が林芙美子と親しかつたのも、養子を赤子の時からもらって夫婦で育て、夫緑敏との「子は」かすがい」にした庶民的家族観を共有していたからであろう。

「産まず女の地獄つてことがあるんだとき。子供を産まない女はその地獄におちてね、燈心で竹の根を掘る責苦にあうんだつてさ」「古い女だよ、お母さんはな、そんな地獄へ落ちたいんだとき」という夫婦の会話が「たからの宿」の中にある。繁治が「生さぬ仲」にこだわる榮を諫めているのである。「二人は俺たちの生んだ子供ではない。それをお前はすまながっているみたいだがね。…略…誰からも感謝されない子供をそだてるなんて、ほとけさんだよ」。そんな繁治の励ましによって、榮は「生さぬ仲」の親子も同じ家に長くくれば縁に結ばれた親子。「愛情が血肉とのみつながらるものではなく、一つ家にもみあつて暮すことによつてのみ、生れる」、「お互いに身をよせあつて暮してきたということは、お互いの人生を豊富にされたのだと、私はありがたく思っている」（私の童話はどうしてうまれたか）との境地を得る。将来の子供好きの榮がやつと胸をなでおろし、やつと安心できる身の置き場所を発見し得たのである。共産党が国家権力によって壊滅した時代に中野鈴子との不倫もあったが、子のない夫婦の責任を女の側だけに押し付けず、妻の姪や又甥を実子同然に可愛がって家族の成員としていった夫繁治のフェミニスト振りは、当時はなかなか例を見ないものであつただろう。だが、それも「暦」や「母のない子と子のない母と」などで描かれた農村共同体の相互扶助性を繁治も同郷人として共有していたからに違いない。左翼詩人としての繁治の評価には、同業者の厳しい眼で臨んだで

あろうが、夫としての繁治には、栄は脱帽と感謝以外なかったのではないだろうか。血のつながりの全くない子供のお父ちゃんとなった繁治の体験談も、またすばらしい。

「産みの親より育ての親」という諺は、親子の愛情さえも血のつながりにおいてではなく、社会的つながりにおいて見た考え方であって、私が私と全く血のつながりのない一人の娘を育てた経験に照らして見ても動かし難い真理のように思われる。

私たちは結婚して二十年以上になるが、遂に子供が生まれなかったし、もう生まれないであろう。その代りに、私は自分と全然血のつながりのない一人の娘を自分の子供同様に育ててきた。そしてこの娘のほかに、またもう一人の赤ん坊を育てている。…略…私の家へ引き取った当時は、今にも死にそうなほどのひどい栄養失調に陥っていたのだが、栄養注射を施したり、高い闇の牛乳やバターを食べせたりして、やっと一人前の赤ん坊に、取り戻し、おくれげせながら最近ようやく歩くようになった。日一日と目に見えるほど知恵づいて行くのを見てみると、そして私たちをほんとうの親と思って、とうちゃん、かあちゃんとまつわりついて来るのを見てみると、自分たちがこの子供を生んだような錯覚に囚われることが屢々あり、親子の愛情が決して血によってだけ繋がるものではないということ、いよいよはつきり痛感せずにはいられない。

（「愛情のよりどころ」『女性ライフ』一九四六年一一〜一二月）

栄とほぼ同世代の円地文子は、癌で子宮を摘出した後に司馬遷に倣って、子宮を亡くした女性の性と恋愛の欲求を創作のまな板の上に乗せ、子宮を失えばこそ、男と交わり子供を生む玄牝の幻想に憑かれる女性の本性（7）を小説の中に探る作家となった。また、真杉静江は男性に愛され子供を産める女でなくなることを恐れて、満身創痍の癌になっても子宮を摘出しなかった。それらを考え合わせると結婚しても子を産めなかった栄が、戦前のうまず女のコンプレックスから抜けだすのはやはり、大変なことであった。繁治の理解と協力があればこそ、栄の女性としての自我は社会的に解放されたのであった。そういう栄の急所を広い人間観でいたわり支えたのは繁治ならではのであった。家族とは何か？ 男系中心の家制度家族とはコンセプトを異にする、もつと社会的な広がりのある新しい家族の形を栄夫婦は作り出し、実践

していった。血がつながっていないなくても、子供を育て、互いに家族としての情誼と責任（縁）を感じあう同居者・同労者であれば、立派な家族なのだ。現行の民法よりも栄夫婦の家族観ははるかに進んでいるのではないか？ 栄も、円地文子など同様に子供を産めない女は女でないとの当時の常識への反発から、父系中心の家制度に対抗する母系的家族社会の平等性や福祉優先性に気づき、母系家族の系譜の現実性を文学で世に問おうとしたように思われる。成功した作品ではないが、「柵欄」（『群像』一九五五年八月〜十二月）は栄の腹藏ない理想の歴史であつたし、万系一世の天皇

制のウソを栄なりに証したものであつた。「柵欄」は男系の家制度が建て前であつた明治大正の世に、女兒しか生まれぬ小豆島の庄屋小判屋の母系の直系が不倫を犯しながら時代を先取りして好きな男の子供を生み、自由結婚への道を開き身分制度を解体していくロマンである。そして、栄は繁治の協力で、産まず女の地獄を「生まず女の極楽」に替える家族の機能と形態を発見したといつて良いだろう。女性（＝母性）とは、家族とは、それらはある時代の支配構造を刻印したコンセプトでしかないのである。少子高齢化が社会問題となっている現在、栄夫婦の家族観にはさまざまな意味で学ぶことが多いのではないだろうか。

『壺井栄』（女性作家評伝シリーズ12）の筆者小林裕子氏は「栄は結婚こそ、人生において最も充足した人間関係であるという対幻想の持ち主で、人にも我にも結婚を勧めたい人間だった」と述べているが、まったくその通りだと思う。それも一つの思いこみには違いないが、裕福な百姓の四男坊のぼんぼんで、サーニンに傾倒したロマンティストから、アナーキスト、マルキストへと青春の遍歴をたどり、家族や仲間の情誼に厚く、共產主義の男女平等は故郷の百姓の慣習だという男、そんな繁治と戦前に出会つてかなり風変わりな結婚生活の中から、二人がそろつて進める道を踏み固めていったから、育ちも性格も違う男女が結婚して得られる人生の味わいと豊かさは、計りがたいという結婚至上主義が栄の持論になっていったのだろう。

そして、栄も繁治も文学者として高名な人間になるよりも、人の役に立ち慕われる人物になりたいタイプの作家であつた。繁治の母親は最愛の四男坊の彼が早稲田大学に入る際、「お前、えらい人間やこいなんでもいいせに、悪い事だけはしてくるなよ。これだけは頼むわ」（『激流の魚 壺井繁治自伝』）と言つたというし、栄は栄で、二番目と四番

目の姉の実話をもとに、同じ神戸に住みながら下町の女中見習いと山の手の裕福な家の養女という境遇に引き裂かれ、会うことも禁じられた姉妹の悲しみを「ともしび」（『石』一九四二年七月）で描いた。「初旅」（『新文学』一九四七年十二月）や「わするなぐさ」（『婦人民主新聞』一九五二年四月六日）でも、村の神童と言われた長兄が師範学校出の教師に立身出世して、「樽屋の息子が教師になって、教師にふさわしい嫁をと思っても、嫁は樽屋の親を嫌がります。貧乏な家をいやがります」と書き送って、両親を泣かせたことに深い衝撃を受けた少女時代を告白している。栄は貧乏で無学で世間で嫌われる仕事をして子育てをした親たちが、なぜその子供に疎まれ、恥ずかしめられなければならないのか？ どんな職業も社会の必要から生まれているものなのに、なぜ、立身出世した子供が親の職業を上から目線で見下し、家族の繋がりがさえも疎遠にしていくのか？ という、共産主義に近づく大きな疑問を少女時代から持ち続けていたのだ。そして、日本の敗戦は、戦争の痛手を被った日本国民同胞が、外地からの引き揚げ者やシベリヤ抑留者、原爆被害者、傷痍軍人、沖繩などを差別するエゴイスティックな分断化を自らの手で行ったのだ。戦後になっても、壺井栄は政治的な発言をあまりしなかった作家だが、「雑居家族」（『毎日新聞・夕刊』一九五五年三月二五日）や「落ちてゆく」（『文芸春秋』一九五七年七月）に描かれているように、理由を作っては金の無心に来る人生の敗残者になった弟藤太郎を、心を痛めながら支え続け姉弟のよしみを大切にした。栄の人間的大きさ、すばらしさは、こちらが相手に心を開いて交わっていけば、どんな相手からでも思わぬ人間的真実がもたされるという信念を実行したことであった。そして、一九五一年四月二六日の日記に「自由党より社会党がよいとは思わぬ」とあるように、栄は進歩的知識人の党派的思考やレッテル貼りに組せず、その実態を担う人物の具体的言動に触れて、頑なに血の通った情報だけを選択しようとする人であった。犬猿の仲であった宮本百合子と林芙美子のどちらからも、人間としての学びができた人であった。

三 「妻の座」の主題

自分の身の内からの女性解放をめざして

ところが、そんな人間通の栄が、やもめ暮らしに難儀していた徳永直から後妻の斡旋を手紙で頼まれ、独身で四〇歳まで教員勤めをしていた妹のシンをめあわせたところ、徳永に嫌われ、もてあまされて二カ月で離縁された。しかし、女性の立場からは納得しがたく、事の顛末を作家の眼で検証しようとした小説が「妻の座」である。

妹閑子（シン）は、容貌の悪さと丙年生まれをことさら卑下して結婚をあきらめ、女教師歴二〇年という仕事柄も手伝って、世間並みの家制度的男尊女卑道徳を間違いないものと考え、自分の幸福をそこからはみ出して追い求めることもない従順といえは従順、堅物の田舎者であった。おおよそ、女性の幸福を追求して周りを変えていこうとする姉とは似ていない、古いタイプの女性であった。ところが、野村（徳永）があえて、「文学がわからなくてもけっこうです。お針のできるやさしい人なら理想的です」と、残された子供たちにとつてのやさしい母親を第一条件に後妻の斡旋を頼んできたので、ミネ（栄）は閑子とその条件にピッタリで、野村が閑子の古さをうまく活用しながら、新しい人間の生き方に導いてくれるだろうと期待して紹介した。敗戦の年の一〇月に治安維持法が廃止され、一二月に新日本文学会の創立大会が持たれ、戦後の民主主義運動の機運が高まっている中でのことであった。「新鮮な友情がおたがいの心に流れ合うように」、「労働者出身の作者として名のある野村氏」（「秋蒔きの種」）が同じ労働者出身というだけでそれまで特に親しいわけでもなかったミネに、四人の子供への愛情とその性格、新しく迎える妻への心配りと、できれば「お裁縫の出来る優しい女」というただ一つの条件を示して、まだ誰にも話していないが、よろしくと言ってきたのだ。栄は野村の率直さと迎える妻への「理解とこまやかなおもいやり」に「心打たれ」、ひと肌もふた肌も脱ぎたいと思ったのだ。しかし、その一方で、恩給目当ての老教員と侮辱されたことに腹を立て、一思いに辞表を叩きつけて小学校教員を止めた裁縫教師の妹閑子の身の上が思い出された。ミネの夫も親友の川島貞子（佐多稲子）もいい組み合わせだと賛成してくれた。配偶者を自分では見つけられない引つ込み思案の二人がうまく結びつけばと願った。しかし、徳永は

どの時代の先端を行く小説家が、「お裁縫のできるやさしい女だけで満足出来るかしら」（「秋時きの種」）という不安が残った。とはいえ、戦後すぐの食料もままならない時期、助け合いから夫婦の愛情も生まれるだろう、とミネは考えたのだった。

しかし、ミネの不安は的中した。閑子は子供たちには喜ばれたが、野村には、好かれなかった。多少のごたごたはあったが、見合いのすぐあと結婚の申し込みがあつて、結婚を急いだのも野村の方だった。ひと月たつても、夫は妻を抱くことが恐ろしくて、まともな夫婦になれていないと、仲人の川島貞子に書き送つてきた。閑子も数入りにミネの家にやつてきて、自分は「その日雇いの家政婦だ」と言った。ミネは驚き、「どうか子供の母としての役目は昼だけにして、夜は妻の座に置いてやつて下さい」と、おせっかい承知で野村に頼む手紙を書いた。それをきつかけに野村は男のメンツを捨てて、夫婦間の誰に話しようもない不幸を打開する道があれば教えてほしいと姉に訴えてきた。「くり返しよんでいると野村の小心さが、それ（離縁の言い出し）も出来ないで悩みつづけているのがわかつてきて」、ミネはおおきなためいきをした。

しかし、妻の閑子の身になれば、自分の存在がそれほど嫌がられ、自分の肉体の中に死んだ美貌の妻との類似点ばかりが探られていることを知らされていない。野村には夫婦の問題を夫婦で解決しようとする気がさらさらない。おためごかしで、川島やミネに救いの手を求めているに過ぎない。それは、暗に閑子が引き取られる以外にどんな手があるのか？ と、謎をかけているだけなのだ。夫婦の愛情の問題を妻に打ち明けもしないで、他人に打ち明けて相談すること自体が、妻への背信行為であり、妻を妻として扱っていない証拠ではないか。閑子は妻ではなく、家政婦として貰われていったに過ぎない。ミネは仲人の川島がことあるごとに野村の死んだ妻は「美人だったわね」と繰り返したことが、また、他人の思惑を気にせず、自分の感じたままをストレートに話す高木千恵子（宮本百合子）が「いかに野村と閑子の組合せが意外だったかというように」結婚式のスピーチでぶつたことを苦々しく思い出し、自分のうかつさを責めるほかなかった。「ああ、あ、男なんてほんとに、私たち（進歩的な仲間）の間でも、やっぱり、男ね。女だって女かもしれない。女だわ。顔のきれいを大きく考えてる。：省略：きれいでないものの肩身狭い思いなんてわからない

わよ。」と真実思う。「みめ美しい小柄な妻のなくなったあとへその妻の遺言によって子供のために裁縫のできる母として迎えられた女、それは大きなからだの、ちぢれた髪の唇の厚い女だった。その外観が女の価値の大部分を決定したところのだろうか。それとよく似たところの多いミネは、共々に恥ずかしめを受けたような思いで自分をふりかえった。それとともに、「ミネの平凡な常識は、野村の置かれた不幸を一つの条件として、女の器量の悪さと差引こうとするようなところがあった」のを悔やまざるを得なかった。四人の子を持つやもめと器量の悪い後妻は「割れ鍋に綴蓋」で、世間的に釣り合っていると見積もって、野村が謙虚な後妻探しの依頼文の影で、有名な作家にふさわしいどんな妻を望んでいるかを軽く考えたことが、閑子を不幸に突き落としたのだと、反省している。

染みついた野村の古さとミネの古さが共謀して、閑子を陥れることになったことをミネは深く反省している。しかし、野村には、労働者出身の共産黨員なら、女性の顔かたちの美醜よりも、閑子の素朴な田舎者振りやいかつい体に現れた重労働の刻印を愛おしんでくれると期待していたのである。実際、ミネは閑子に「文学者は心やさしい人間で、みめ形よりも心やさしい者、気の毒な者を愛してくれる」（「草いきれ」）と野村との縁談を勧めたのであった。一九四六年一〇月の新日本文学大会全国大会に参加した三谷ひろ子（太田洋子）も「結婚なんぞもうこりごりなはずなんですがね、やっぱり女はそんなわけにもゆかんのじゃね。でも共産党の人なら普通の男のように分らんことはいいなさるまいって、母もそういうんですよ」（「妻の座」）とミネに話しかけ、黨員との結婚を心に決めている時代であった。戦後すぐは共産黨員の株が歴史的に上がった時期でもあった。

壺井栄と同世代の女性評論家板垣直子は『明治・大正・昭和の女流文学』（一九六七年六月）で「妻の座」を次のように評している。戦後初頭の文学状況に詳しく、女性作家研究の草分けでもある板垣ならではのコメントであると思われる。

作者はこの作品で、不可抗力な容貌の問題から、結婚の幸福をえられなかった女の悲しい宿命を見送るだけではなかった。作者の考え方によると共産主義は非常に高い立派な思想であるというのに、その立場にある人間の野村が、あいまいで、ずるいやり方をし、ごまかしの処世術をしているそのエゴイズムを、批判したかったのである。あい

まいな態度で結婚を承諾し、やっぱりひくつなやり方で、結婚を解消した。そして、それにより一人の誠実な女性の肉体を傷つけ、魂を破り、運命を狂わせたそのことに、責任を感じていないらしいことを、個人的な怒りを離れ、ヒューマニズムから、突きたかったのである。女は全く自分の意思にそむいて妻の座を動かされ、追われる。そのことへの抗議である。しかし、作者がもつと自覚的に、野村を批判し、野村を追求しなければ、この作品の効果は弱いし、作品にも近代性が出てこない。

（「壺井栄」『明治・大正・昭和の女流文学』）

それでは、野村の結婚式で、「野村と閑子の組合わせは似つかわしくない」とスピーチした高木千恵子こと宮本百合子は、小説「妻の座」をどう評価しているのだろうか。共産党の党員やシンパが戦前からの「わが家」的雰囲気の中で戦後も微温的に繋がっている実情をよく知る宮本のコメントである。

「妻の座」は、題材の困難さも著しい。作者自身としては題材のむづかしさ、苦しさに力の限りをつくんでゆく努力に自覚をあつめてゐるうちに、この作家がこれまで書いて来た平明で、まとまりよくおさめられた作に見られなかった苦渋をにじませた。常識と分別、ひとがらのかしこさがくつがへされて、むき出された人間関係のえぐさは、「妻の座」の場合、作品の世界の中で関係しあつてゐる人物たちが、我知らずその精神、生活態度のうちにもち運んで来ている小市民的先入観、世俗性のもつれであつた。「妻の座」はこの作家について論じるとき無視することのできない特殊な一作となつた。

（『婦人と文学』一九五一年四月）

恐らく、宮本は、「妻の座」と同時期に「新日本文学」に掲載されていた徳永の「妻よねむれ」も合わせて読み、徳永がすべての場合に女性差別者とは言えず、閑子の旧弊で閉鎖的なコミュニケーション下手も考えあわせての、公平で的確な評価だと思われる。国家と国民社会を変革しようとする前衛（共産主義者）でさえ、その主體的自我の中にはまだまだ克服されなければならない非民主主義側面の多いことを痛感させられた一作であつただろう。

そして、栄が良くも悪しくも戦前からの親類関係であるような、どろどろした共産党の人間関係に手をつ込み、その中に巣くっている女性差別を取り上げた点は評価していると思われる。

つけ加えておくと、徳永直の方も七年後に、糾弾された夫の側から「妻の座」で明らかにされなかった押しつけ婚の

プロセスと、閑子との間でのバトルを暴露した「草いきれ」（『新潮』一九五六年八月）を敵対的に発表した。「妻の座」と同名の登場人物を再登場させて、栄が後妻の斡旋ではなく、後妻の押しつけをしたこと、また、夫をインポテンツに陥らせるほどの妻の不器量と「恐怖にちかい圧迫感」と、夫婦の満足な交わりができない夫への妻の侮蔑と懲罰的暴力を暴露した。また、離縁された妹を引き取る際、栄夫婦が徳永を足蹴にし、ぶったことも明らかにした。シンへの不足を妾で補えとご提案したとも言う。しかし、栄と徳永のアングルの違う小説の競い合いそれ自体、読者には面白いものでもあるが、作中人物閑子のモデル、シンは、「草いきれ」発表の時点では四国で再婚して新しい生活に入っていた。シンへの恨みがどんなに深いものであっても、慰謝料ももらわず追い出し離縁に甘んじた先妻を、再び、前の夫との夫婦関係を暴く小説に再登場させて良いものであろうか？ しかも、シンは作家で無く、自分の言い分を対等に読者に届けることができないのである。作家のモラルとして、新しい結婚に踏み出している元妻の過去をことさら暴いてジャーナリズムに売り渡すことは、慎むべきだったのではないだろうか。また、籍も入れていなかったことが書かれているが、それこそ、野村が閑子を妻として扱わず家政婦として扱ったことの証であろう。

「草いきれ」とは、ミネが野村のためらいを知らずに閑子との結婚にまでこぎつけた後の、野村のミネへの復讐劇、「藪の中」の自己正当化である。仲人の川島宛てに次のような手紙を送り、ミネにも閑子を好きになれないと、結婚の解消をせまった。

閑子さんに欠かんがあるわけではありません。私の方でなじめないのです。二一年間のせんの女房がそまりついていて、それが邪魔して閑子さんになじめないのです。――閑子さんの手、足、腰の線、声、眼、髪、そのどこからもぐりこもうと思っても、私はいつかせんの女房の共通点をさがしているのです。閑子さんはまるでちがいます。せんの女房は九文の足袋をはく女でした。私の腕の中にはいつてしまう女でした。子供はもう猫の子のようになっています。しかし、裁縫ができて、家計が上手だということだけで、男はなかなか惚れはしない。――（妻の座）「草いきれ」では、閑子には直接「出ていけ」と言えない野村のおためごかしの行為が、短く次のように書かれている。野村は川島貞子と大井峯に手紙を書いた。川島には結婚直後から二三度かいていて、大井峯も川島を通して知って

る筈であつたが、大井峯に直接書くのは始めてだつた。閑子についてはつきり不満を書く度胸がないので勢い亡妻との事ばかり強調し、弁解した手紙になつた：

つまり、無責任な野村は、「裁縫のできる女」という現実的な再婚の条件を結婚後に撤回し、「私の腕の中にはいつてしまふ」、自分の身体の一部に溶け込んでしまふ美しい女の幻影という自分勝手な夢を告白したのである。国民の一人万人が餓死すると言われた敗戦期に、家政をやりくりし、四人の子供の良き母親役と夫に気に入られる魅力的な人妻役とを兼ね備える後妻など、徳永のネーム・バリューを押し出し、新聞で求人広告したところで簡単には見つからなかつただろう。それだから、徳永は、閑子を入れて四人もの後妻を取り換え引き換えしなければならなかつたのだ。栄が言うように家族同士もみ合いながら、時間をかけてそれぞれの人間関係の有り方や暮らしぶりを踏み固め、家族が助け合い愛し合える集団に成長するのが再婚の目的のはずだ。栄と繁治の結婚も「恋愛の果てのやむにやまれぬ気持からではなく、実をいえば互いに青春の夢に破れた二つの魂が、そつと寄りあつて黙つてめいめいの痕をなめ合いながら、何かを築いてゆこうというような変な関係であつた」（渋谷道玄坂）。しかし、そこからでも二人の努力で真実なるものを築きあげられたと、ミネは実感している。その互いの人生に対する責任感と同志愛とでもいったものが徳永夫婦にはなかつた。結婚式はあげたものの披露宴も他人任せで、何よりも大切な法的結婚の手続きをしていない。まだ新しい民主主義的民法が行われる手前の時期ではあつたが、結婚手続きをしていなければ、閑子は離婚を裁判で争うことさえできなかったのである。徳永は「草いきれ」の最後で「とにも角にも結婚申込みをしたのは自分だつた。―あのとき、あんなに不安だつたのに、何よりも自分の気が小さく、弱いのがいけなかつた。そのくせ周囲にあまえ、周囲を信じ過ぎていたのが不可なかつたのだ」と反省しているが、閑子は、二か月間、裁縫の上手な家政婦として精一杯心を尽くしてたた働きをし、夫の意思による一方的な追い出し離婚で叩き出されたのである。夫婦の関係づくりの工夫もしなければリーダーシップともれない野村と、子供の母親の役割に甘んじた閑子の関係が破綻したのは、「あの体裁屋ともいえるほどの自尊心の強い」閑子と、徳永の臆病で無責任な自己卑下的自我が夫婦の間に激しくぶつかり、相手のトラウマを逆などし合つたからであらう。閑子は「お前みたいな不纏致（きりよう）者はいやだ、離縁するからさつさと出ていけつて。

ちゃんと私の前で云つてみたらどうですか」とインポテンツになった夫に挑み、「——こんちきしよ。ひつぱたいてやろうか」と小突き回し、徳永は「努力はしてみるが、見込みはたちません」というところで屈服しまったから、関係の再建はできなかったのである。しかし、結婚の解消について、野村は醜い女には馴染めないという女性差別を堂々と理由に挙げて、夫の権利を行使したことには違いないのである。栄は身内の身びいきになるのを恐れて、もう一步、徳永のエゴイズムを追求できていないのは、板垣の言うとおりである。

注

- (1) 中村隆英『昭和経済史』四章 1 (岩波現代文庫 二〇〇七年五月)
- (2) 中村隆英『昭和経済史』四章 3 (岩波現代文庫 二〇〇七年五月)
- (3) 本多秋五「転向文学論」3 (『第三版 転向文学論』 未来社 一九七二年一月)
- (4) 二歳違いの壺井繁治と徳永直は、少年時代ともにアルツハイパーシエフの『サーニン』にかぶれ、江田島の兵学校を志望した。壺井栄は徳永と同年で香川女子師範学校へ進む夢を持っていた。
- (5) 壺井繁治「一本の枯草」(『激流の魚 壺井繁治自伝』 光和堂 一九六六年二月)
- (6) 小林裕子『壺井栄』第五章3 (新典社 二〇一二年五月)
- (7) 須浪敏子「原妣考」(『円地文子論』 おうふう一九九八年九月)
- (8) 「草いきれ」には、「戸籍はもちろん配給登録といったものもしてなかった」と書かれている。